

INDEX

- 1 メッセージ：脱会トラブル
- 2 高橋弘のモルモン人物伝：スターリング・マクマリン
- 3 投稿：モルモンは身分制である
- 4 モルモン教のメディア戦略：タバナクル合唱団の真相と実力
- 5 リアホナを斬る：2004年3月号から
- 6 モルモンQ & A：知恵の言葉
- 7 ニュース

わたしたちの活動と自己紹介ページは [こちら](http://www.5e.biglobe.ne.jp/~iemnet/htm/about.htm)
<http://www.5e.biglobe.ne.jp/~iemnet/htm/about.htm>

～ ご購読ありがとうございます ～

脱会トラブル だらエモン

1999年5月15日に「勇気と真実の会」が設立され、今月で丸5年が経ちました。現在は少ない運営委員で細々と活動していますが、モルモン教会員からの脱会相談・問題に関しては設立当初より現在まで一貫して取り組んでおります。個人的なことですが、私は「勇気と真実の会」(以下単に"会"と表記)が設立された1週間後に脱会届をモルモン教会(所属ワードの監督宛)に提出しました。私の場合は監督が脱会に関し理解のある方だったので比較的スムーズに脱会届が処理されましたが、脱会に関しては何もわからない状態でしたので、会からのサポートが無ければ脱会出来なかったと思います。

当時サポートして頂いた関係者の方々にはこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。"監督が脱会に関し理解のある"と前述しましたが、会宛てに寄せられる脱会問題の殆どがワードの監督(支部は支部長)の脱会に関する無理解から来ているものと言っても過言ではありません。

何故監督が無理解なのか?いろいろ考えてみたのですが、これはやっぱりモルモンがカルトだからでしょう。「モルモンは唯一真」「モルモンでなければ救われない」であり、少なくとも私もモルモン教会に入り、モルモン教会の様々な疑問に気付くまでの10年以上堅く信じていました。監督・支部長とてこれは同じで、脱会(=背教)すると死後は確実に救われないため、自分が管理する教会員の脱会届の処理に躊躇するように思います。

最近ある方から、PBO(管理本部)から各ユニット(ワードor支部)宛てに脱会届を速やかに処理するよう通達が出されたと聞きました。しかしこれで脱会問題は解決するようにはとても思えません。実際この通達の後にも監督が脱会届を処理してくれないという相談が会宛てにありました。根本的には「モルモンは唯一真」「モルモンでなければ救われない」というカルト性をモルモン教会自身が棄てない限り脱会に関する問題は無くならないでしょう。もちろん、カルトゆえ脱会に関する事だけがモルモン教会の問題ではありませんが、モルモン教会への信仰が無くなった方がモルモン教会に所属する必要は全くないということから、重要な問題です。

(前回会報でも紹介されましたが)作家の立花隆氏はモルモン教を「成功したカルト」と評しました。モルモン教会に脱会等モルモン教会自身が抱える様々な問題を認識される為にも、モルモン教会の活動をこれ以上「成功」させてはいけません。

高橋弘のモルモン人物伝(2) スターリング・マクマリン

スターリング・マクマリン(1914~1996)・・・ユタ大学の名物哲学教授で、ケネディー大統領が全米からもっとも優れた政権担当者を集めたが、その一人(ケネディー政権の教育顧問)。数冊の優れた著書のなかでマクマリンを時の人に押し上げたのは、『モルモン神学の哲学的基盤』The philosophical Foundations of Mormon Theologyである。モルモン教の信仰内容をもっとも分かりやすく説明し、高い評判を勝ち取った書物であるが、とくにモルモン教会の黒人の扱いにかんする見解をめぐり、超保守的な教団幹部から「異端」とみなされた。しかし、マクマリンは、包容力のある人柄と深い学識によって多くの人々から愛された、行動派の知識人であった。

マクマリンはソルト・レーク・シティ郊外で生まれる。父方の祖父は、ユタ開拓のパイオニアの一人で、モルモン教会の第一・七十人定員会の会長となったエリート。彼自身も多妻婚の実践者。父ジョセフは大学教授で、子どもにプラトンやダーウィン、ダンテを読ませるリベラルな考えの持ち主。母ガートルードは心の広い教養ある優しい母で、モス家の出身。モス家は教養ある裕福な家系。母方の祖父は、成功したビジネスマンで、大規模な畜産会社の社長、また銀行の頭取であった。

幼少の頃、マクマリンはモス家の祖父母の牧場で、乗馬や家畜の放牧を手伝うのが、勉強と同じくらい楽しみだったという。14歳のとき一家はロサンゼルスに転居。高校卒業後、カリフォルニア大学(UCLA)に入学するが、喘

大学院では哲学を専攻。その後モルモン教会のセミナリーやインスティテュートの教員となり、アリゾナ州のインスティテュートの責任者になるが、辞して大学院に戻る。

南カリフォルニア大学で博士号を取り、そのまま大学で教鞭をとっていたが、請われてユタ大学教授となり、そのままユタ大学で、教授、学部長、大学院部長等として（途中でケネディー政権の教育顧問として）、40年間勤めた。マクマリンがなぜケネディー政権に入閣したかは興味深い話だが、これは別の話。

マクマリンは、リベラルな知識人として、自分の信念に忠実であった。大学にかんしては学問の自由を擁護し、また政治的には黒人の公民権を擁護した。このため、1960年代には、超保守的な教団（幹部）からは異端の烙印を押され、一時期、破門の瀬戸際にあった。マクマリン自身は、自らをモルモン教徒と考えていたが、それは、第一に自分がモルモンの家系で育ったこと、何よりもその家族を愛していたこと、家族や自分の歩んできた歴史を大切にしていたからである。しかし、マクマリンの黒人に対する立場と教団の立場は真っ向から対立（教団が黒人に神権を開放するのは1978年のこと）。教団内部の一致を重視する幹部はマクマリンに黙従を強要。しかし、マクマリンはそれに屈しなかった。教祖スミスを愛することと、スミスの多妻婚を肯定することは別であり、教会と指導者を尊敬することと、指導者の言動をそのまま受容することとは別である、と言う。

マクマリンを異端視したのは、ジョセフ・フィールディング・スミスとハロルド・リーの二人で、二人とも後日、大管長になった教団の大物。フィールディング・スミスの父は六代目大管長ジョセフ・F・スミス、祖父は教祖スミスの兄ハイラム。フィールディング・スミスは幼い頃から誰よりも父を尊敬し、その教えをミルクのように吸収してきた。彼は高卒ながら弱冠34歳で使徒に抜擢され、また教団の「教会史家」として正統的教義を擁護する立場にあった。このことが、リベラルなマクマリンと対峙する決定的な要因であったと思われる。まだ地域の指導者だった時から目の敵にし、マクマリンを「悪魔」と公言して憚らなかつた。一方、ハロルド・リーについては、スミス以上に護教的で、マクマリンを「モルモン教会の最大の敵」とみなしていた。この陣営に後日、ボイド・パッカーが加わることになる（因みに、マクマリンはパッカーこそ現在の教団をここまで混乱させた元凶と見ている・・・）が、じつはパッカーを鍛えたのは他ならぬリーであった。かつてリーはパッカーに、「おまえは、信徒の側に立つのか、それとも教団の側に立つのか、どっちだ」と迫ったことがある。こういう洗礼を受けてからパッカーは信徒を捨て、只管教団の弁護に奔走。現在このパッカーに、ダリン・オークスやニール・マクスウェルが加わっている。教団内部でマクマリンが敵視されはじめたころ、時の大管長マッケイ（フォーン・プロディーの伯父）が自らマクマリンに面会を求め、マクマリンにこう言ったという（これは有名な話）。

“They can't do this to you. They can't do this to you! If they put you on trial, I will be there as the first witness in your behalf.”（あの幹部たちが、きみにそんなことができるはずがない。彼らに、そんなことをさせはしない。万が一、きみが教会裁判にかけられるようなことがあれば、私が最初に証言にたつて、きみの弁護にあたろう）。

そして、別れ際にマッケイが言った言葉は、

“Sterling, you just think and believe as you please.”（スターリング、きみはきみの好きなように考え信じたまえ）。

実際、マクマリンはこのマッケイ大管長の助言どおりに生きた。モルモン教団は長年にわたってマクマリンの歯に衣を着せぬ批判にさらされ続けた。また歴代の大管長は、ついでマクマリンを破門にすることがなかった。しかしモルモン教会がその黒人差別に関して「黒人地位向上協会」から痛烈な批判を浴びたとき、マクマリンはスポークスマンとして立ち上がり、（教団の教義は別として）モルモン教徒は決して黒人に差別的ではないと語り、モルモン教徒を弁護した。最後にマクマリンの教団批判の一部を紹介して稿を閉じよう。

「私は子どものころから『モルモン経』を真理として受け入れることができなかった。天使から書物をもらう訳がないし、奇跡によって翻訳ができる訳がない。それでも自分はモルモン教会を愛しているし、自分を忠実なモルモン教徒だと思っている。教会は書物以上のものである。なぜなら教会は、互いに交わる人々によって、さらに人々の希望、相互の愛、喜びによって成立しているからである。モルモン教会は宗教としては、また道徳的文化としては良い面が多々ある。

「われわれは皆、教会において教化され、個人の知的自由は奪われていく。モルモン教会は憎むべき歴史の歪曲操作を試みている。使徒ボイド・パッカーのような教団幹部は、モルモン教会の偽らざる歴史は信仰にとって危険であると考えているらしい。教団幹部が操作を試みる理由はなくもない。というのは、教団は信徒から歴史の主要部分を隠蔽してきたからであり、同時に、教団が歪曲し修正してきたその歴史に、信徒の信仰を結びつけてきたからである。モルモン教会が情報を統制してきたことは、珍しいことでも驚くべきことでもない。いろいろな組織にとって、真理は必ずしも歓迎すべきものではないからである。

「モルモン教会が歴史を悪用するのは今に始まったことではない。歴史の悪用は、モルモン教会創始以来のことであるし、おそらくは今後も同様であろう。どのような制度であれ、諸々の教会も、政府も、その他の政府機関も、歴史的事実を無視したほうが、あるいは歴史的事実を少々ねじ曲げたほうが得策だと考えることがしばしばある。もしもモルモン教会が、真実の歴史より修正した歴史のほうが見栄えがするし、信徒を統制するのに都合がよいと判断した場合

という教団の目的を遂行することだからである」。

参考文献

L. Jackson Newell, Sterling Moss McMurrin: A Philosopher in Action, Dialogue, Vol.28, No.1, pp.1-17
An Interview With Sterling McMurrin, Dialogue, Vol.17, No.1, pp.18-43
Jack Newell interviews Sterling McMurrin, Sunstone Symposium, August 1993
Peggy Fletcher Stack, " McMurrin Differed in Gentler Times ", THE SALT LAKE TRIBUNE, February 22, 1997
高橋弘「宗教と知識人」『人文科学研究』国際基督教大学、キリスト教と文化研究所、1997年

投稿 モルモンは身分制である Wild Rose

私は長年モルモンに集ってきましたが、「モルモンは身分制である」と今でははっきりと言えます。もっともモルモン書には「人間は平等である」と書いてあります。

しかしそこに何が書いてあるかは関係ありません。なぜならモルモンはモルモン書でさえ自分たちの都合が悪ければ無視するからです。

モルモンにはモルモン教会を、その組織を支える上での三つの重要な教えがあります。

1) 大管長は預言者である

2) 預言者に従え

3) (その預言者が任じた) 指導者に従え

我が日本では戦前まで天皇は神であると信じられてきました。その考えのもとに身分制が生じ冠位十二階の制定やさらに大納言、少納言などと言う太政官制度もできました。それと同じ様に大管長という人物を「人間ではない『預言者』」に仕立てることによってモルモンの身分制は維持されていると思います。

。「預言者は人間だ」と言われるかもしれませんが。しかしモルモン教では預言者の言う事は神の言う事と同じだと教えられていますし、そう信じられています。つまりこれは現人神と同じではないですか？戦前の天皇と同じです。

つまり大管長を「預言者」に仕立てることによってその下に十二使徒やその他ワードの監督までの身分を作ってきたのではないですか？

それに何より従わなければならない指導者がいるのならそれは身分制ではないのでしょうか？そうではありませんか？

モルモンの教会員の中にはモルモンが身分制だと聞いて奇異に感じる人がいるでしょう。それはそれは教えていないからに過ぎません。だから、モルモンではたいいていのが大なり小なり人間関係に悩まされています。モルモン自身が認めているように不活発になる要因の殆どが人間関係の軋轢です。以前は世の誘惑に負けたからだと言っていました。それは嘘である事がもう分かっているはずですよ。

このことは理屈で考えるよりも素直に感じたほうが分かりやすいと私は思います。

「あなたが悩んでいる人間関係・もしくは今持っている人間関係は本当に平等、対等な関係の上に成り立っているものですか？それはゆがんだ物ではないのでしょうか？それがあなたのこころもゆがませていませんか？」

連載 モルモン教のメディア戦略 たりき タバナクル合唱団の真相と実力

本号から何回かに分けて、モルモン教のメディア戦略に関して語りたと思います。今回は、モルモン・タバナクル合唱団を取り上げます。

モルモン教会の「広告塔」になっている有名人や団体は色々ありますが、ほとんどのアメリカ人が、モルモンと聞いてまず真っ先に思い浮かべるのは、モルモン・タバナクル合唱団だと思います。事実、タバナクル合唱団は、教会の最強の広告塔として、今まで利用されてきました。

モルモン・タバナクル合唱団の特徴は、何と言ってもそのサイズです。合唱団のメンバーは全員がボランティアで、その数は実に360人を数えています。

(実際に歌う際は、320から340人程だそうです。)タバナクルの大きなドームで、大オルガンをバックに歌う合唱団は、スケールの大きなものが大好きなアメリカ人には、大変親しまれているようです。1887年に設立された合唱団が、全米規模で有名になったのは、1929年に始まったラジオ番組(現在はテレビでも放送されています)、「Music and the Spoken Word」のためでしょう。その放送の中で、彼らは他のクリスチャンに愛されている賛美歌を歌ったり、愛国心を煽るような歌を歌い、モルモンがアメリカで広く受け入れられる基礎を作りました。

モルモン教会は合唱団の芸術的レベルについて、昔から大風呂敷を広げて自慢してきましたが、そのレベルは、実際にはどの程度なのでしょう？アメリカでの知名度の割には、タバナクル合唱団の録音が、日本の市場にあまり出回っていないこと(国内盤は現在、1枚しか発売されていません。)や、合唱団が一流の指揮者やオーケストラとほとんど共演していない事などは、クラシ

しいレベルにあるのなら、世界中の音楽家や、レコード会社が彼らを放っておくはずはないと考えたからです。

この私の疑問は、ソルトレーク市のタバナクルで行われた、彼らのコンサートに行くことによって、解消されました。一般的にクラシックのコンサートでは、音響のよいホールに助けられ、マイクは全く使用しないものなのですが、そのコンサートでは、終始、マイクが使われていました。しかし、「素晴らしい音響」が自慢のタバナクルで、大人数の合唱団に、マイクを使用する必要性は、どう考えてもありません。

では合唱団は、なぜマイクを使用するのでしょうか？

やや専門的になりますが、どの合唱団でも、言葉（歌詞）を明瞭に聴衆に届けるために、言葉の発音、特に子音の発音（ディクションといいます）を、それぞれの歌手が同時にする必要があります。そうしなければ、言葉の発音がずれてしまい、何を歌っているのか分からなくなってしまうからです。また音程（ピッチ）も厳密にあっているなければ、このサイズの合唱団では、響きがとてもしも濁ってしまい、大変聴きづらくなります。しかしながら、練習時間の限られたアマチュア歌手である彼らが、よく訓練された歌手にとって難しい、これらのテクニックを、容易に行えるとは思えません。

それらの問題を一挙に解決できる方法が、マイクの使用なのです。マイクを使うことによって、合唱団の発音も明瞭になり、コーラスの響きも電氣的に調整できます。また生の合唱団の声と、電氣的に増幅された声を巧みに合わせることによって、一般的に聴衆は、マイクの使用を意識することはまず無いでしょう。それに、マイクで音量が増しているのですから、合唱団の歌声は、より迫力を増します。実際に合唱団がしばしば、音響的には最悪である野外で歌ったり、大規模なホールで歌ったりしている事実は、私が上に述べた事を裏付けています。（ただし、合唱団が常にマイクを使用している、と言う事ではありません。）

タバナクル合唱団のコンサートに7～8回通って得た、私の結論は、モルモン・タバナクル合唱団は、芸術的なクオリティよりも、大人数でエンターテインメント的な演出を優先した、教会の広告塔的な芸能団体に過ぎない、という事です。

次回は、合唱団と教会系のメディア戦略について、もう少し掘り下げます。

参考になるウェブサイト：

<http://www.lds.org/placestovisit/location/0,10634,1879-1-1-1,00.html>

（教会の公式ページ内のサイト）

<http://www.mormontabernaclechoir.org/>

（合唱団の公式サイト）

<http://www.legacyrecordings.com/mormontabernaclechoir/>

（ソニー・ミュージックのサイト）

連載 リアホナを斬る（第2回） 木塚灯八

2004年6月号 「主はわたしたちの苦しみをご存じです」

本題に入る前に、モルモン教義ではイエス・キリストの生涯をどう考えているかを少し説明します。モルモン教義によればイエスは、いと高き神の直接の子供として生まれたにも関わらず、一般の人間とまったく同様に日々の仕事をこなし、収入を得て暮らしていた。そして様々な人生の困難に直面したけれども、それらの問題は全て『人間が努力すればなし得る方法』によって克服したということになっております。

今回のリアホナの記事は、こうしたモルモン独特のキリスト理解がベースになっています。その上で私たちが人生の色々な苦難に遭うときには、イエス・キリストも同様の苦しみを経験されており、私たちの苦しみを知ってくださっているのだから安心したらよいのだ、ということが記事の主旨になっています。

まず、根本的なことを考えてみたいのですが、イエスの地上での生活がそういうものであったかという点については何を根拠としているのでしょうか？記事の筆者であるクーバー長老はアルマ書7章12節や、教義と聖約122章7-9節を挙げています。しかし、新約聖書を普通に読めばイエスが盲人を癒したり、足萎えを歩かせたり、死者を生き返らせたりしている様子が描かれているわけで、どう考えてもイエスが神の力を使わず人間の力だけであらゆる困難を乗り越える生涯をおくったとする考えるは、聖書とは相容れないものです。この概念は神学的な事柄に言及するまでもなく、モルモン教義独自のものだとと言えるでしょう。

ただ、少し肯定的に考えてみますと、困難に打ちひしがれているときに教義と聖約122章のように「私はあなたの苦しみを理解している。私も同様の経験をしてきた。この苦しみはつかの間だ。あなたに経験を与えるためのものだ」という救い主の声を啓示によって耳にすることができたなら、たしかに大変勇気づけられ、慰められるというのとは分らないわけではありませぬ。

（もっともこの啓示があったとされる時期、ジョセフはリバティの牢獄に捕えられていたのであり、その原因はモルモン教会が危険な宗教団体となって、地域住民とトラブルを起こしていたからなので、いわば自業自得なのですが）個人的な推測ですが、ジョセフ・スミスは良い言葉で言えば常にプラス思考、悪く言えば自分勝手な楽道家だと思えます。教義と聖約122章というのは、ジョセフが牢獄の中でも自分を正当化し、自分自身を勇気づけるための方便を思いついたのだらうと私は思います。

ところで、イエスが人間に起こりうるあらゆる苦難に身を落としたというの

は30数年と言われていますが、その年数で人間のあらゆる苦難を経験することとは物理的に不可能ですし、それでもイエスが神の子であるからそれを成し得た、とするのなら、その時点でイエスが『人間が行い得る方法で』自分の生涯を送ったとは言えなくなってしまいます。

イエス・キリストが人間の苦難を理解して下さっているのだということ、(他の様々な事項でも同様ですが)モルモン教義から説明しようとする、このようにおかしな部分ばかりが目についてしまい、深く追求することはできません。ここら辺がモルモン教義は浅知恵だと思ってしまうところなのです。

さらにクーパー長老は、主がどのような方法で人間の苦難や重荷を取り除いて下さるかを分析しているのですが、これもまた極めておかしな内容です。このように説明しています。

- (1) 重荷を取り除いてくださるか、または軽くしてくださる。
- (2) 重荷に耐えられるよう、わたしたちの力を増し加えてくださる。
- (3) 重荷が増し加わるままにして、わたしたちに必要な経験をお与えになる。
- (4) わたしたちの信仰を試し、強めるため、また教訓を与えるため、すぐには助けをお与えにならない。

・・・このような方法で主に頼る人の重荷を取り除いてくださるのだというのですが、よく読めば、重荷が取り除かれても、取り除かれなくても、それで善しとせよということです。これでは、どのような結果になっても主が助けて下さったということになってしまうわけです。こんな説教にいったい何の意味があるのでしょうか？

たしかに信仰篤い人でも大変な苦勞を背負い込むことがあります。そういう人が何年も悩み苦しむ、その結果として「主が私のためになるようにこの苦勞を背負わせたのだ」と自分で悟ったという話は、聞く者の胸を打つものです。しかし、苦しみの中にある人を見て、第三者が「その苦勞はあなたのためなのだ」と安易に結論付けるような真似はあまりに無礼です。モルモン教会幹部の話には随所にそういう無神経さを感じられるのです。

たとえばこの記事の中で、あるワード書記の経験として紹介されているエピソードが語られています。その人は教会の帳簿の処理にてんてこまいだったそうです。

この書記は、主のもとに行って祈りました。「お父様、わたしは書記の仕事をよく学べるように助けてください、と祈りました。それなのに、記録に関してありとあらゆる問題が起こっています。」答えはすぐに、心の中に返ってきました。「だから、助けたではありませんか。」

まるで安っぽいコントを見ているかのような屁理屈です。たとえこれが実話であったとしても、このような稚拙な話で、「主はわたしたちの苦しみを御存じです」と題した話ができる神経はいかかなもののでしょうか。

モルモン幹部の認識では、主に助けていただきたい苦しみとはせいぜいこの程度のもんです(まあある意味彼らは幸福な人間です)。結局、モルモン教義では人間の深いところにある悩みや苦しみを汲み取ることなどできないのだと如実に物語っているように思います。

モルモンQ & A 知恵の言葉

Q1、先日教会員と持ち寄り食事会に誘われたので「ポテトチップとコーラー」を持参しました。するとある教会員に「コーラにはカフェインが含まれているから飲んではいけない」と指摘されました。その上「カフェインの含まれた飲み物や食べ物、アルコールの使われた食品・調味料も駄目」といわれてしまいました。私は聖典に書かれた物(コーヒー、お茶、酒、タバコ)を避けて来ましたが、最初に聞かされた事と違い困っています。

A1、70年代には「コーラを飲むものは神殿推薦状をもらえない」と言う通達が出されていました。しかし、現在ではコーラは容認されているようで、基準が曖昧になっています。こうした、「これを食べて良いか、悪いか」と言う議論はモルモンの間ではもう何十年も続いています。彼らにとっては深刻な問題のようですが、結局議論は「祈って決めましょう」と言ういつものさえない結論におさまっています。本当に解決を考えるなら、知恵の言葉の歴史的背景にまで踏み込んで考える必要があるでしょう。

当時の教会歴史資料には、この「知恵の言葉」が教えられた後にも、ジョセフ・スミスの自宅には酒場があり、食事中にはワインを皆で乾杯したり、葉巻や噛みタバコなども嗜んでいたとの記述があります。また知恵の言葉は厳格に守る必要は無いとも教会員に対して彼は話をしていました。当時の教会員の日記にも彼らがコーヒーを飲んでいただけの記述が数多く見受けられます。

平信徒たちには禁欲的生活を強いて、教団幹部は放埒を尽くすというのはカルト宗教の普遍の特徴ですね。

また近年、カテキンやカフェインの有効性が実証されています。科学的な面からもモルモン教が言うコーヒーやお茶が有害で健康に悪いからという「知恵

こうしたいい加減なものが戒めとして教義とされることが、普通の宗教ではありえません。ましてやイエスは
「口に入るものは人を汚さず、口から出て来るものが人を汚すのである。」
(マタイ15:11)
と述べています。
「あれは飲んで良いのか、これは食べては駄目なのか」という考えは全く非キリスト的です。こうした戒めとそれを教義とするモルモン教は捨てて生きるのが人間らしい、自由な生き方なのです。

ニュース

勇気と真実の会は会員募集中です。
詳しくは当会へお問い合わせください。

投稿記事募集

脱会体験、モルモンについて思うことなど、なんでもお寄せください。文章はプレーンテキストで作成してください。

BYUハワイ校と提携の高校生英語スピーチコンテストの予選がいよいよ始まりました。京都では民主党の国会議員福山哲郎が金沢では自民党国会議員の馳浩がゲストとして招かれました。福山議員は挨拶程度、馳浩議員は自身のスピーチが終わると早々に退席したとのことでした。しかし、教団はイメージアップのため議員の列席を宣伝すると思われます。当会は両議員に対して注意を喚起するメールを送付いたしました。

河出書房新社が、ジョン・クラカワーの「Under the Banner of Heaven: A Story of Violent Faith」の翻訳出版を進めているとのこと。出版は来年とのことですが、モルモン教の実態を伝える強力な資料が加わる事になります。

メールマガジンバックナンバー（創刊第1号）はこちら

<http://cgi.kapu.biglobe.ne.jp/cgi-bin/SD/view.cgi?0009211+mail1>

メールマガジンの購読申し込みはこちら

http://www5e.biglobe.ne.jp/~jemnet/htm/biglobe_mailmaqa.htm

- ・ 発行者 勇気と真実の会 会報編集部
- ・ ホームページ <http://www5e.biglobe.ne.jp/~jemnet/index.htm>
- ・ メールアドレス jemnet@mrc.biglobe.ne.jp

Copyright(c)1999.JEMNet. All Rights Reserved.

無断での転載・転写・複写・転送などは禁じます。
転載・複写の際は、事前に発行者へご連絡ください。

【解除はこちら】

<http://cgi.kapu.biglobe.ne.jp/m/9211.html>

このめるまがはお客様からのご登録に基づき、カプライトより配信されました。
解除希望・お心当たりがない方はこちら <http://kapu.biglobe.ne.jp/regist.html>